

今年4月、伊豆諸島・八丈小島にクロアシアホウドリの群れが飛来しました。そのようすと今後のことについてレポートをいただきました。今後が楽しみです。

八丈小島におけるクロアシアホウドリに関する報告と今後の保全対策

岩崎由美（伊豆諸島自然史研究会、事務局長）

樋口広芳（東京大学名誉教授、慶應義塾大学特任教授）

IUCN（国際自然保護連合）のレッドデータリストの絶滅危惧2類に分類される、クロアシアホウドリ（*Phoebastria nigripes*）の新たな繁殖地となりうる地域が、今回、新たに発見されました。この発見は鳥類生態学および保全生物学上、きわめて重要な意味をもっています。

その注目すべき場所である八丈小島は、八丈島の北西7.5kmに位置する面積3.08km²の無人島です。1969年に全島民が離島する際、残されたヤギが一時は1000頭以上に増加、食害や踏圧などで植生が破壊されていましたが、2001年の試験捕獲を経て2002年～2007年度駆除作業が行われた結果、当該地における野ヤギはほぼ撲滅されたと考えられています。

2013年4月14日（午前）八丈島の遊漁船船長が、八丈小島でクロアシアホウドリを目撃したとの情報を受け、同16日に岩崎他2名が上陸し、約30羽を確認しました。同20日には岩崎、樋口、佐藤文男（山階鳥類研究所）他5名が上陸し、再度約20羽を確認。推定3歳前後の若い個体群が形成されており、新たな繁殖地を求めての飛来と考えられました。繁殖前に雄がつくる産座や、つがい形成のための求愛行動が確認され、早ければ今年11月にも営巣、産卵が行われることが予想されます。他の伊豆諸島の島々でみられるヘビ類やイタチなどの外敵がいなこと、繁殖に適した地形、何より野ヤギの駆除が完了し自然度が回復した事が、本種の飛来の大きな要因であると思われます。これまでの本種の繁殖北限地（鳥島）より300km北に位置し、繁殖期の採食地となる茨城県から千葉県にかけての沿岸域がより近くなることも繁殖生態に関する興味深い要素です。クロアシアホウドリとアホウドリの繁殖地の環境条件はほぼ同様であり、近い将来、八丈小島がアホウドリの繁殖地となる可能性もあります。

今後必要な保全対策として、生息地への立ち入り制限、監視カメラの設置、繁殖生態の解明、由来個体群の特定、捕食者となりうるカラス類やウミネコの対策、保護地域の設定ならびに利用指針の策定などがあげられます。地元が中心となり保全と利用のガイドラインを設定することで、国内で最もクロアシアホウドリが観察しやすい場所として大きくアピールしていくことができるでしょう。この地域の自然の宝物がひとつ増えた……私たちは、そのように感じています。



八丈小島に飛来したクロアシアホウドリたち



八丈小島の全景。手前は八丈島 photo by H.Kawachi